

これは買い!?
気になる新製品をいち早くテストする!

New Products Review



ローカルプロキシーでウェブを高速化
Surf Express

NEC初の低価格パーソナルルーター
COMSTARZ ROUTER



アナログ通話機能が充実した電話帳内蔵TA
TD503

シリアルポートが100メートルまで延長できるTA
TS128JX /DZ



実売で3万円を切る -LCR3対応の低価格TA
TM-AD1281

Atermの機能を拡張するS/T端子ユニット
高機能S点ユニット



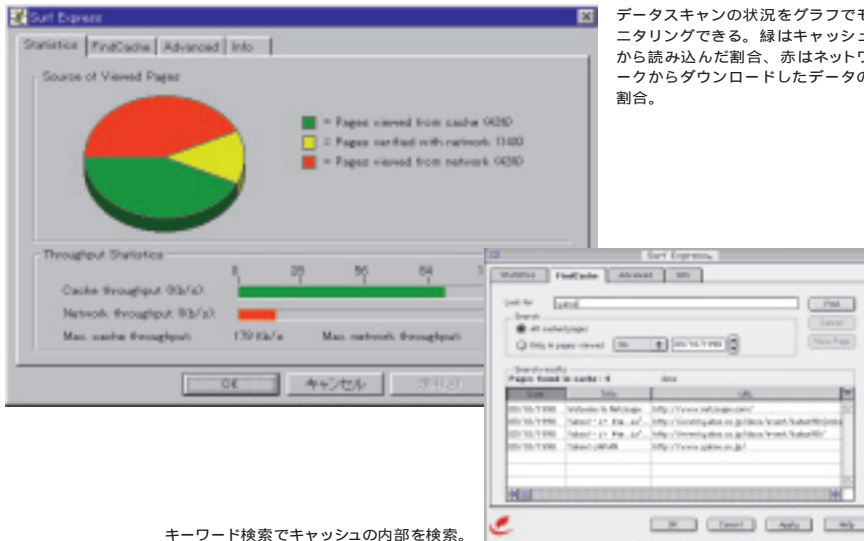
動画と音声をNetShowで送れる
LiveMail Ver.2.0

ローカルプロキシでウェブを高速化

Surf Express

Check!

キャッシュを1つのファイルにして高速化
複数のブラウザでキャッシュを共有
キャッシュデータの保存時間などが設定できる



キーワード検索でキャッシュの内部を検索。

データスキャンの状況をグラフでモニタリングできる。緑はキャッシュから読み込んだ割合、赤はネットワークからダウンロードしたデータの割合。

Connectix社のSurf Expressは、ネットサーフィンを高速化するユーティリティソフトだが、従来のリンク先読みタイプ的高速化ソフトとは異なる発想で作られている。

仮想プロキシで高速スキャン

Surf Expressは、Connectix社の独自技術によってハードディスク内に仮想プロキシサーバーを作り、ネットサーフィンの履歴をキャッシュとしてデータベース化することで、それ以降同じサイトにアクセスしたときはキャッシュデータを読み込んでネットサーフィンを高速化するソフトだ。そのサイトに更新がある場合には、その部分だけをダウンロードする。必要な設定は、インストール時に自動的にしてくれるので特に知識は必要ない。この自動設定によって、使っているWWWブラウザの「HTTP Proxy」が「127.0.0.1」に、ポートが「2400」のローカルアドレスに変更され、Surf Expressのキャッシ

ュを参照するようにする。実際のプロキシサーバーが必要ならSurf Expressに本物のプロキシが自動的に設定される。こうすることで、ブラウザからSurf Express経由でインターネットにアクセスすることになる。

このキャッシュファイルは、1つのデータベースファイルとしてSurf Expressのフォルダー中に作成される。通常はWWWブラウザごとに別々のキャッシュフォルダーがあり、その中でサイトごとに別々のファイルがキャッシュされるが、このソフトのように1つのファイルならスキャンも断然速い。また、このデータベースは、インターネットエクスプローラでもネットスケープナビゲーターでも同じキャッシュを使うことができるため、どちらのブラウザからアクセスした場合でも同じキャッシュを使うことができる。また、キャッシュファイルのサイズや保存時間なども設定が可能だ。

開発元	Connectix corporation
発売元	株式会社メディアビジョン 株式会社システムソフト
価格	8,800円(予定)
動作環境	ウィンドウズ95/NT4.0のOSで、486以上のCPU、8Mバイト以上のメモリー(16Mバイト以上推奨) 12Mバイト以上の空きハードディスク容量、ネットスケープナビゲーター3.0以上もしくはマイクロソフトインターネットエクスプローラ3.0以上のWWWブラウザ MacOS7.5以上でPowerPCを搭載したマッキントッシュで、16Mバイト以上のメモリー、12Mバイト以上のハードディスク空き容量、ネットスケープナビゲーター3.0以上もしくはマイクロソフトインターネットエクスプローラ3.0以上のWWWブラウザ
URL	http://www.connectix.com/html/surfexpress.html

試用レポート

① 操作を意識せずに高速化

通常、Surf Expressはコンピュータに常駐させて使うことになる。指示に従ってインストールすると、WWWブラウザのプロキシをSurf Express用に自動的に設定してくれる。あとは、普段と同じようにネットサーフィンをするだけで、特に操作などは必要ない。設定の変更やネットワークの状況を確認するときには、常駐しているSurf Expressを立ち上げて操作する。

気になる「高速化」されるかという問題だが、実際に使ってみたところ、確かに速くなっているようだ。確認のために設定画面を見てみると、なるほどすでにキャッシュされているサイトにアクセスした場合には、データをキャッシュから読み込む比率が高くなっている。逆に、キャッシュにないサイトではネットワークからの読み込みが多くなる。ISDNの64Kbpsで使ってみると、混雑することの多い人気サイトでは、完全に表示されるまでに7~8秒を要したが、Surf Expressでは3秒くらいで読み込みが終わった。平日の昼休み(12時~)はアクセスが集中する新聞社系のサイトで試してみても、その効果は明らかだった。ただしアクセスするたびに変わるパナー広告などは、そのつど読み込むので表示が遅かった。

特に操作が必要でもないのに、Surf Expressを使っている意識はあまりないが、実際に使ってみると快適さは向上した。前述したようにWWWブラウザに依存しないのも嬉しい。現時点では高速化ユーティリティの「本命」と言ってしまうのもいいだろう。なお、今回のレビューは英語版で行ったが、日本語版は3月20日にシステムソフトとメディアビジョンの2社から発売される予定だ。(編集部)

NEC初の低価格パーソナルルーター

COMSTARZ ROUTER
(CHZ-RT-D1)

Check!

DSU内蔵で5万円台の低価格
PIAFSはサポートしていない
メールの自動着信機能を5月に追加予定

発売元	NEC
価格	58,800円 (DSUなしのCHZ-RT-S1は51,800円)
問い合わせ	0120-498563
付属品	ACアダプター、モジュラーケーブル
URL	http://ccsd.biglobe.ne.jp/comstarz/router/router_index.html



COMSTARZ ROUTERのボディカラーは白。筐体もコンパクトで、デスクに設置しても違和感はない。積み重ねできるように本体上部にはくぼみがある。

COMSTARZ ROUTER (CHZ-RT-D1) は、NECが2月18日に発売したダイヤルアップルーターだ。同社はこれまでネットワーク管理者向けなどにプロユースのルーターを提供してきたが、COMSTARZ ROUTERは初のパーソナルルーターにあたる。価格はDSU内蔵モデルが58,800円で、NTT-TE東京/ビー・ユー・ジーのMN128-SOHO/DSU (69,800円) に比べて1万円以上も安い価格設定になっている。

コンパクトなボディ

COMSTARZ ROUTERの筐体は210(W)×170(D)×40(H)ミリで、既存のルーターはもちろん、TAと比べてもコンパクトな設計だ。ボディ前面にはインジケータランプが並び、ネットワークの接続状態やISDNの通信状態がわかるようになっている。COMSTARZ ROUTERは、S/T端子を1つ、アナログポートを2つ搭載している。このアナログポートは、内線通話や転送、優先着信、簡易フレックスホン、簡易コールウェイトニング、簡易三者通話、簡易着信転

送などの機能を持っている。なお、内蔵のDSUは切り離しができないので、DSUが不要な人は、DSUなしのモデル(51,800円)を購入するといふ。

PIAFSのサポートはなし

COMSTARZ ROUTERは、ISDNやOCNエコノミー、高速デジタル専用線を利用して、インターネットやLAN間接続などに使うことができる。ただしPIAFSはサポートしていないので、SOHOなどでリモートアクセスサーバーに接続して使う場合はPIAFSからのアクセスができない。128KbpsのマルチリンクPPP(MP)やBOD、BACPをサポートし、セキュリティープロトコルはPAPとCHAPに対応する。また、LAN側の対応プロトコルはTCP/IPのみだ。さらに、データ圧縮としてSTAC LZSをサポートし、最大で512Kbpsの通信速度を実現する。ただしこの機能を使うには接続先もSTAC LZSをサポートしている必要があり、LAN間接続の場合に相手側もCOMSTARZ ROUTERを使っていれば、

STAC LZSの圧縮効果が得られる。

アドレス変換機能を搭載

ダイヤルアップルーターの場合、コンピュータとルーターを10BASE-Tポートで接続することになるため、コンピュータにLANボードが必要になる。COMSTARZ ROUTERは本体に10BASE-Tのハブ機能も併せ持ち、10BASE-Tポートは4つ搭載している。これはMN128-SOHOの3ポートと比べて1ポート多く、コンピュータ4台までならハブを増設しなくても接続することができる。ただし、RS-232Cポートを搭載していないので、TAとして使用することはできない。

また、アドレス変換機能、NATe (IPマスカレード)機能をサポートしているので、端末型ダイヤルアップの契約IDが1つでも、COMSTARZ ROUTERに接続された複数のコンピュータで同時にインターネット接続が可能だ。

着信メール自動確認機能

5月に予定されているファームウェアのバージョンアップによって、着信した電子メールを自動で確認できる機能が追加されることになっている。これは、あらかじめ設定した時間になると、自動的にアクセスポイントにダイヤルアップしてメールサーバーに着信しているメールの有無を確認する機能だ。NECのTA「Atermシリーズ」に搭載されている「電子メール着信通知機能」は、ISDNのDチャンネルを利用して新着メールの確認を行う機能でサポートするプロバイダーが限定される(BIGLOBEのみ)が、COMSTARZ ROUTERの着信メール確認機能は通常のBチャンネルを使用するもので、プロバイダーは問わ

ない。この機能の詳細はまだ明らかにされていないが、NECによると、メールのヘッダーなど数行をダウンロードするものになるという。新着メールがあったときには本体のLEDランプでわかるようになる。また、アナログポートに接続された電話機からもメールの着信の確認ができるという。これは楽しみな機能だ。

停電対策用の電池ケースは別売

最近のコンピュータ関連製品は電源を内蔵するものが多いが、COMSTARZ ROUTERの電源はACアダプターで供給される。このACアダプターはかなり大きく、電源タップによっては隣のコンセントまで塞いでしまう。そんなときにはパソコンショップなどで売っている電源アタッチメントケーブル(400円程度より：写真参照)を使うといいだろう。

また、停電時は別売のバッテリーバックCMZ-OP53を使えば電池駆動(単3アルカリ電池6本)が可能になる。このバッテリーバックを使えば、停電時でもアナログポートに接続された電話機を使うことができる。なお、このバッテリーバックはWWW販売のみの取り扱いで「<http://www.nec.co.jp/comstarz/>」で申し込む。価格は2,000円で、別途送料が500円かかる。停電対策の機能がないルーターやTAの場合、停電でルーターやTAが使えなくなると、アナログポートに接続された電話機も使えなくなってしまうだけに、別売ではなく標準で備えてほしかった。

試用レポート

① 設定はWWWブラウザから

接続から設定までは簡単だ。付属のモジュラーケーブルの片端を壁にあるNTTのモジュラーソケットに差し込み、もう片方を本体のISDN端子(LINE端子)に差す。COMSTARZ ROUTERの場合、ISDN端子は「LINE」、S/T端子は「ISDN」となっているので、間違えないように注意しよう。電話機をアナログポートに接続する人は、接続が終わったら、電話がかげられるどうかを最初に確認しよう。もし電話がかからないときには極性反転スイッチを切り替えて試してみるといい。

設定はWWWブラウザで行う。ブラウザを起動し、URLに「<http://192.168.1.254:8888>」を入力すると、WWWブラウザにメニュー画面が表示される。ここで「かんたん設定」

を選択して、接続先名、アクセスポイントの電話番号、ログイン名、パスワード、DNSアドレスを設定すればOKだ。設定内容をフラッシュメモリーに保存するには「設定保存」をクリックすればいい。接続先を複数設定できるので、複数のプロバイダーと契約している人や、オフィスのネットワークにダイヤルアップする場合などに、接続先を使い分けることもできる。

② テレホーダイの時間帯は

「接続延長」ボタンをクリック

COMSTARZ ROUTERをはじめとするダイヤルアップルーターは、WWWブラウザを起動したり、メールソフトで送受信を行ったりして、ネットワーク接続の要求があった場合にルーターが自動でダイヤルアップ接続を行う。TAと違って「ダイヤルアップネットワーク」を起動させなくていいので、ダイヤルアップでインターネットに接続しているという感じがほとんどない。TAやモデムにくらべると、専用線に近い感覚でインターネットができると言えるだろう。そのため、接続していることを忘れてしまいがちだが、COMSTARZ ROUTERは一定時間通信が行われないと自動的に通信を切断する無通信タイマー機能を搭載しているので安心だ。

ただし、この無通信タイマー機能が邪魔になることもある。それはNTTの「INSテレホーダイ」サービスの時間帯で、この時間帯にはつながばなしにしたいという人は多いだろう。こんなときにルーターが無通信タイマーの設定をオフにできればいいのだが、COMSTARZ ROUTERには「INSテレホーダイ」の時間帯に自動切断の設定を無効にできる機能はない。その代わりに、無通信タイマーを延長させる機能があるが、いちいちWWWブラウザから「接続延長」ボタンをクリックするのは面倒だ。

③ 今後はファームウェアで新機能を提供

COMSTARZ ROUTERは、WWWブラウザの設定画面上でファームウェアをバージョンアップできる。PIAFSへの対応や、INSテレホーダイ時間帯の接続の自動延長機能などは、今後ファームウェアのバージョンアップで提供されるという。前出の着信メール自動確認機能は5月に対応する予定だ。競合製品のMN128-SOHOも、昨年の発表から現在に至るまでに幾度ものファームウェアバージョンアップによって現在の高機能を実現したことを考えると、COMSTARZ ROUTERもこれと同様に今後の機能追加に期

待したい。

設定も簡単で価格も安いCOMSTARZ ROUTERは、ルーター入門者にも簡単に扱えるダイヤルアップルーターといえるだろう。

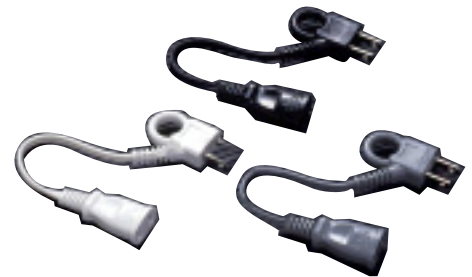
(編集部)



背面。左から、電源スイッチ、ACアダプター、アナログポート2つ、10BASE-Tポート4つ、アース端子、S/T端子、ISDN端子、極性反転スイッチ。



WWWブラウザによる設定画面。



ACアダプターのサイズが大きいときは、こうしたアタッチメントケーブルが便利だ。

COMSTARZ ROUTER (CMZ-RT-D1)

接続インターフェイス	10BASE-T
同期	64/128Kbps(MP)
PIAFS	×
BOD	BACP対応
DSU	
S/T端子	1
アナログポート	2
10BASE-Tポート	4
ナンバードisplay	×
アドレス変換機能	NATe(IPマスカレード)
停電対策	(別売バッテリーバック)
液晶表示	×
専用線/OCNエコノミー	
ファームウェア	フラッシュメモリー
外形寸法(W×D×Hミリ)	210×170×40
重量	800g
消費電力	最大約15W

発売元	株式会社アレクソン
価格	51,200円
問い合わせ	03-5645-8571
付属品	RS-232Cケーブル、変換コネクタ、ISDNケーブル、壁掛け用ネジ

URL <http://www.alexon.co.jp/>

アナログ通話機能が充実した電話帳内蔵TA

TD503

Check!

多機能アナログポートを3つ内蔵
付属ソフトでFAXの送受信ができる
マルチジョグダイヤルが使いやすい



液晶ディスプレイとマルチジョグダイヤルを搭載したTD503のインターフェイス。

TA (ISDN) といえば、これまではアナログに比べて通信速度が速い点や、2回線使えるといった利点を中心に紹介されてきた。だが、ISDN回線を使ったデータ通信機能だけでなく、電話やFAXなどのアナログ機能がどれくらい使いやすいのか。これが、これからのTAを選ぶ際のポイントといえるだろう。アレクソンのTD503は、電話を便利に使うための機能を数多く搭載し、インターネット利用者以外にもアピールできる製品だ。98年3月からローソンや有名量販店での販売を開始することからも、TD503が単なるインターネット用の通信機器にとどまらないことを示しているのではないだろうか。

データ通信機能

データ通信機能は、同期64Kbps / 128Kbps、非同期38.4Kbpsに対応し、PIAFSもサポートしている。128Kbps通信においては、BODやBACPにも対応。また、停電時でも電池駆動でアナログポート(TEL1のみ)を利用できる。データ通信機能を見ても、最近のTAで対応している機能にはおおむね対応している。しかし、TD503の一番の特徴は電話の通話機能にある。

TAにおける電話機能

TAの電話機能は、NTTのサービスをTAに取り込む「疑似」機能の搭載から始まった。たとえば、「コールウェイトング」という電話を保留する機能は、NTTに毎月一定額を支払って利用するものだった。しかし、今ではどのTAも「疑似コールウェイトング」機能を搭載し、NTTと契約しなくても電話を保留する機能が使えるようになった。電話を自動的に転送する「着信転送」や、登録した番号のときだけ呼び出し音を変える「なりわけサービス」など、NTTのサービスを次々と取り込みながらTAの電話機能も充実してきたのだ。これは、少しでも毎月の料金を減らしたいユーザーズにもマッチしたものだ。TD503は、TAの中でもっとも強力な電話のアナログ機能を搭載したものだといえるだろう。たとえば、着信転送機能を見てみると、NTTの転送では1つの電話番号を設定できるのだが、TD503の「フリー転送」では、初めの転送先に何らかの理由で転送できないときには、第2転送先に転送することが可能だし、転送失敗時にはアナログポートにつながった留守電を呼び出すこともできる。また、転送の設定はリモートでの設定が可能だし、設定した時間帯だけ自動的に転送するタイマー機能もある。さらに、昨年6月にスタートしたNTTの「INSなりわけサービス」に対応したうえに、NTTとの契約

が不要な「疑似なりわけ機能」を搭載。かかってきた番号によって特定の電話機だけを呼び出す「プライベート着信」を搭載している。このような芸当は、NTTのサービスだけでは到底不可能なもので、TAがサポートすることで電話の使い道が大きく広がったと言える。

ナンバーディスプレイ

TD503は、ナンバーディスプレイ対応のアナログポートも独立3ポートを搭載した。ISDNでは、従来から発信者番号通知がサポートされていたが、アナログ電話のナンバーディスプレイのサービス開始に合わせて、ISDNでも従来の機能にプラスする形でナンバーディスプレイサービスが提供された。このサービスによって、アナログ電話からの電話番号も表示できるようになり、アナログからの電話も発信者によって各アナログポートを割り当てることができるようになった。上で述べた「疑似なりわけ」などのアナログ機能を利用するには、ナンバーディスプレイサービスの契約は必須だろう。

また、ナンバーディスプレイ対応電話機の中には、仕様が異なるものがありトラブルの原因になっているようだが、このような場合にも対応できるよう2種類の設定を用意している。最初の設定で表示されない場合は、2番目の設定を使うわけだ。仕様の差異をTA側で吸収するという発想は、実際に利用するユーザーの立場に立ったもので、ナンバーディスプレイへの対応を見ても、TD503は細かな配慮が行き届いている。

FAX & テレフォニー機能対応

ドイツRVS Datentechnik社の「RVS-COM」は、TAでFAX(G3)を含めたテレフォニー機能が利用できるコミュニケーションツールで、最近のTAの新製品においてはライト版「RVS-COM Lite」のモデルが標準になりつつある。このTD503でも、もちろん「RVS-

COM」に対応し、添付の「RVS-COM Lite」でFAXの送受信に加え、留守番電話、ファイル転送機能などを利用することができる。さらに、スタンダード版にアップグレードすれば、FAXの一括送信や電子メール機能、コンピュータのリモート操作なども可能になる。

また、-ALPHA3(旧 -LCR3)にも対応するので、アナログポートに接続されたすべての電話機やモデムで第二電電が簡単に利用できる。

扱いやすいジョグダイヤル

液晶ディスプレイは専用の12桁×2行+専用表示セグメントのものが使用され、バックライトが明るいので視認性はバツグン。操作は4つのスイッチとマルチジョグダイヤルで行い、その操作も簡単に扱いやすい。マルチジョグダイヤルは、設定時以外には内蔵の電話帳を選択する機能を持ち、TD503で電話をかけたい相手の電話番号を選び、電話機の手話器を持ち上げると電話がかかってくる仕組みだ。電話帳には、すべてのアナログポート共通の電話番号が40件と、各ポートの短縮ダイヤルが各20件まで登録できる。

試用レポート

①ユーティリティで設定

DSUのON/OFFと極性反転は背面スイッチで、終端抵抗や停電モードの設定はディップスイッチで行う。S/T端子は2つあるので、増設が簡単だし、DSUが切り離せるので2台目のTAとしても使いやすい。

ハードウェアがセッティングできたらコンピュータとRS-232Cケーブルで接続し、ユーティリティソフトをインストールする。まずアナログ設定だが、設定項目が非常に多いのに驚かされる。たとえば、着信設定では「ダイヤルインのみ」、「契約番号のみ」、「ダイヤルインと契約番号」、「すべて着信」から選ぶことができ、発信者番号通知の有無、識別着信、着信音の鳴り分け、コールバック、中継機能、短縮ダイヤルの登録など、かなり広範囲な設定ができる。また、「テレホン・アシスト」では、コンピュータで管理する電話帳をTAで利用できる。この電話帳を登録しておくと、TAに内蔵された電話帳とは別に、コンピュータから直接電話をかけることができる。通話記録には、電話番号や時刻、通話時間、料金など発信信どちらも細かい履歴が記録され、電話帳に登録された番号に関しては相手の名前が表示される。

正直なところ、設定項目が多すぎて初心者には難しいのではと思う。また、設定を補助するヘルプもまったくなく、結局マニュアルを見ながら設定することになった。ごく簡単なものでもヘルプファイル程度は用意してほしいものだ。せっかくの機能が初心者は使えないのではもったいない。

②BODの手動切り替えが簡単

128Kbps通信時のBOD機能によるチャンネル数の増減が、自動切り替えだけでなく、本体前面のボタンによって手動でもできるので、大きなデータのやり取りをする際など、必要時に2チャンネル使うことがとても簡単にできる。

また、同様に感心したのが「着信転送」と「プライベート呼び出し」だ。転送先には2つの電話番号が設定でき、転送に失敗すると最後の手段としてアナログポートに接続された留守番電話を呼び出すことができる。携帯電話にPHSと、複数の電話機を使い分けしている人には便利な機能だ。また「プライベート呼び出し」は、アナログポートごとに設定できる短縮ダイヤルに登録された電話番号からかかってきたときに、その電話機だけを鳴らす機能だ。先の「着信転送」と組み合わせると「プライベート呼び出し」の電話だけを転送することが可能になる。これを使えば、自分宛ての電話だけを携帯電話に転送することができる。ただし、転送する場合はTAから転送先(携帯、PHSなど)までの電話料金は自分が負担することになる。

ナンバーディスプレイ

		工事費2,000円/回線
		月額
アナログ	住宅用	400円
	事務用	1,200円
INS64	住宅用	600円
	事務用	1,800円
INS1500		18,000円

ナンバーリクエスト

電話番号を「通知しない」でかけてきた相手に、番号を通知してかけ直すように音声メッセージで伝える機能。かけた人は電話料金が必要だが、かかってきた人の電話の着信音は鳴らない。ナンバーディスプレイ契約者のみ利用できる。

		月額
アナログ	住宅用	200円
	事務用	400円
INS64	住宅用	200円
	事務用	400円
INS1500		2,000円

③便利な「なりわけ機能」

「疑似なりわけ機能」を使ってみた。短縮ダイヤルに登録された番号からの呼び出し音は、通常の呼び出し音と異なり、やや短めで他の電話と区別が付きやすい。特定の人からの電話を待っているときなどに使うと便利だ。また、識別着信を設定すると、特定の条件、たとえば短縮ダイヤルに登録された番号のときだけに着信させることもできる。特定の相手以外の電話のときには電話の呼び出し音を鳴らしたくないときなどに有効だ。

④ナンバーディスプレイ対応

ナンバーディスプレイ対応電話機の購入を考えている人は少なくないだろう。それならば、いっそのことISDNにしてTD503のようなナンバーディスプレイ対応のTAを買うというのも1つの選択肢だろう。手持ちの電話機で、転送機能や三者通話、プライベート呼び出しなどが使えるようになるし、FAXを含むテレフォニー機能も一気に入れるのだ。

TD503は、インターネットなどの通信機能について十分なスペックを抑えたいうえで、現時点では最も充実した通話機能を装備したTAだ。

(梅垣まさひろ)



背面。左上から右へ、電源コード、電源スイッチ、ディップスイッチ、S/T端子2つ、DSU切り離しスイッチ、ISDNポート、極性反転スイッチ。左下から右へ、アース端子、RS-232Cポート、アナログポート3つ。

TD503

V.110(非同期)	9.6/19.2/38.4Kbps
同期	64k/128Kbps(MP)
PIAFS	
専用線/OCNエコノミー	×
Dチャンネル/バケット	
DTE速度	230.4Kbps
BOD	BACP対応
DSU	
S/T端子	2
アナログポート	3
ナンバーディスプレイ	全アナログポート対応
FAX(G3)機能	(RVS-COM)
LCR	-ALPHA3
停電対策	単3/専用ニッカド×6
液晶表示	
ファームウェア	フラッシュメモリー
外形寸法(W×D×Hミリ)	192×175.7×65
重量(電池除く)	約800g
消費電力	約9W

シリアルポートが100メートルまで延長できるTA TS128JX /DZ

Check!

TAの置き場所が自由になるESP搭載 マルチファンクションキーで設定できる 最新のアナログ機能搭載

発売元	サン電子株式会社
価格	49,800円
問い合わせ	0120-863810
付属品	RS-232Cケーブル、DSUB9-25変換アダプター、ISDNケーブル、モジュラーケーブル、ESPユニット



本体の液晶ディスプレイはNTTのナンバーディスプレイにも対応。左はESPユニット。

3月6日に発売されたSUNTAC TS128JX/DZは、TS128JX/Dの後継機種。ナンバーディスプレイに対応したアナログポートは3ポートに増え、アナログ機能も強化した。また、TS128JX/DZ最大の特徴がESP(Extension Serial Port)だ。ESPを使うと、TAとパソコンの接続を100メートルまで延長でき、配線がぐんとな楽になる。

パソコンとTAが離れていても大丈夫

ESPは、サン電子独自のシリアルポートを延長するためのポートで、延長には市販されている4芯の電話用のモジュラーケーブルが利用でき、最大で100メートルまで延長できる。接続には「ESPユニット」(ES230-A:付属)を使い、TAには6極4芯のモジュラージャックが「ESPポート」として用意されている。コンピュータのRS-232Cポートと「ESPユニット」をRS-232Cケーブルで接続し、「ESPユニット」とTA本体をモジュラーケーブルで接続する。

「ESPユニット」には別途電源を供給する必要はない。なお、データ転送速度はTAの最高速度と同じ、230.4Kbpsとなっている。ESPで使用する6極4芯のモジュラーケーブルなら、20メートルぐらいまでのものは手に入りやすいし、同じ長さのシリアルケーブルに比べても安い。また配線時に通風孔を通したり、家具の裏に配線するといった作業を行うときにも、モジュラーケーブルならコネクターも小さくて楽だ。

TAと電話機をISDNのモジュラージャックのそばに置き、そこからパソコンまでを延長したいという用途なら、ESPを使ったTS128JX/DZが一番手軽で安上がりな方法だろう。

マルチファンクションキーで設定

ESPと並ぶもう1つの特徴は、マルチファンクションキーと液晶表示だ。これらが付いたことで、TA本体だけでさまざまな設定ができるようになった。コンピュータから設定するにはいちいちパソコンを立ち上げなくてはならないので面倒

だし、電話機からの設定はマニュアルを見ないとわからないのがほとんどだ。このTAではちょっとしたアナログ機能、たとえば出かける前に着信転送を有効にするというような操作が、TAの操作だけでできるのは便利だ。

また液晶表示は、データ通信のときにも威力を発揮する。通信モードや接続先電話番号が表示されるのでTAの状態が一目でわかるだけでなく、128Kbpsで接続しているときには、キーを押すだけで1B(64Kbps)と2B(128Kbps)を切り替えられる。たとえば、FTPで大きなファイルを転送し始めるときに手動で2Bにしておくといった使い方が可能になる。流れているデータの量に従って自動的に1Bと2Bを切り替えるBOD(Bandwidth On Demand)の機能ももちろん使えるが、接続したり切ったりが頻繁になって電話代がかさむケースがあるばかりか、特に必要ない場合でも通信データ量がMPの設定値を超えると自動的に2チャンネルになり、臨機応変に2チャンネルを使うことができないこともある。そんな場合には、手動で必要なときだけ128Kを利用することができる。

ナンバーディスプレイ対応

アナログポートはNTTのナンバーディスプレイをサポートしているので、対応する電話機を接続すればその電話機に発信者番号を表示できる。もちろん、TA本体の液晶にも表示される。アナログポートを含めて発信とも8件まで電話番号、時刻の履歴を保存しているので、TAからキー操作でリダイヤルしたり、かけ直したりするときにも便利だ。またアナログ電話機がナンバーディスプレイに対応していなくても、TAで行える。TAと電話機を同じ場所に置いておくのなら、ナンバーディスプレイ対応の電話機に買い換える必要はない。TAの上に電話機を載せて使うことのできる「Telephone Station」が付属するのも、そのような使い方を想定して「電

話機を買い換える代わりにTAを買いましょう」という提案だ。これは、なかなかおもしろい提案だ。

また、アナログポートが3つになったのもうれしい点だ。電話、FAX、モデムで3つ使うというのがよくある使い方。3ポートは、これからのTAの標準的なポート数になっていくだろう。

試用レポート

① 64/128Kbpsの切り替えを 本体キーの操作で

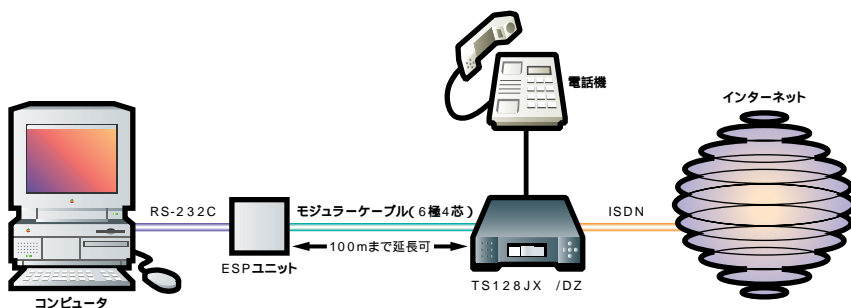
TAのインストール自体は特に何も問題ない。背面のスイッチで、DSUのON/OFF、終端抵抗のON/OFF、極性反転スイッチを確認のうえ接続する。設定ファイルもウインドウズ95/NT用とマッキントッシュ用が付属するので、これらを使って簡単にインストールできる。「TS128JX かんたん設定ユーティリティ」を使えば細かい設定もできる。

実際にインターネットに接続してみると、液晶に接続の状態が表示されるので安心感がある。また、接続状態でそれとは知らずファンクションキーの「>」を押したところ、データの転送速度がbps単位で表示された。中央の「決定キー」は、1Bと2Bの切り替え。この「決定キー」を3秒以上押しつづけると強制的に回線を切断する機能もある。当然ながら、ESPでパソコンとの接続が速い場合はパソコンの前から手が届かないから使えないが、こればかりはいたしかたない。

② ESPを使ってシリアルを延長

手元にあった30メートルと10メートルの2本

接続図



電話機をTAのそばに、コンピュータはTAと離れた場所(最大100メートルまで)に設置できる。住宅の1階に電話があり、コンピュータは2階で使う場合などにも便利だ。

のモジュラーケーブルを延長コネクタでつないで合計40メートルとし、「ESPユニット」を使ってTAとコンピュータを接続したところ問題なく動作した。モジュラーケーブルは100メートルまでの6種4芯のものなら何でもよいが、複数のケーブルを延長コネクタで接続するとうまく動かないことがあるとの注意書きがある。サン電子に問い合わせたところ、質の悪いケーブルやコネクタでなければ、実際には2本程度接続しても大丈夫のようだ。市販の4芯ケーブルは1本20メートルまでが一般的だが、延長コネクタで接続して使っても多分大丈夫だろう。よく売られているソニーやビクターのケーブルは動作確認済みで、ケーブルはクロスでもストレートでも問題ないとのことだ。なお、サン電子ではケーブルの販売も行っているの、長いケーブルが入手できないときにはこちらで購入するといだろう(ESP-50:50メートル、5,500円、ESP-100:100メートル、9,000円)。

③ 電話機と一緒に置くTA

TS128JX/DZは電話機と一緒に置くと便利なTAだ。たとえば、8件記録されている発信

番号の履歴から選択してリダイヤルできる。リダイヤル操作すると、相手を呼び出すとともにアナログポートの電話機も鳴る。着信に関しても、電話に出なくても履歴が残るので、留守のときにかかってきた電話もあとでかけ直せる。NTTのナンバーディスプレイを申し込んであれば、ISDNや携帯電話以外からの場合も電話番号が残る。

④ 操作感にはやや不満が残る

全体的に使いやすいITAに仕上がっているのだが、気に入らない点は何と言ってもファンクションキーの操作感だ。キー自体がグニャグニャして安定感がないうえに、キーの操作体系が階層構造になっていてわかりにくい。これらの点は慣れてしまえばなんでもないのであるが、やや使いづらく感じた。ただ単に階層構造にするだけでなく、よく使う機能へのアクセスを簡単にするなどの配慮は必要だと思う。なお、TS128JX/DZはフラッシュROM搭載でファームウェアのバージョンアップが容易な設計なので、今後の新しいバージョンで改良される余地が十分にある。(梅垣まさひろ)



背面。左から、ISDN端子、極性反転スイッチ、S/T端子、RS-232Cポート、ESP端子、アナログポート3つ、電源スイッチ、アース。左上の2つのスイッチはDSUのON/OFFスイッチと終端抵抗スイッチ。

TS128JX2/DZ

V.110(非同期)	4.8/9.6/19.2/38.4Kbps
同期	64k/128Kbps(MP)
PIAFS	
専用線/OCNエコノミー	×
Dチャンネル/バケット	×
DTE速度	230.4Kbps
BOD	BACP対応
DSU	
S/T端子	2
アナログポート	3
ナンバーディスプレイ	全アナログポート対応
FAX(G3)機能	RVS-COM対応予定
LCR	×
停電対策	単3電池×6
液晶表示	
ファームウェア	フラッシュメモリー
外形寸法(W×D×Hミリ)	160×183×48
重量(電池除く)	約600g
消費電力	約7W

実売3万円を切る -LCR3対応の低価格TA

TM-AD1281

Check!

RVS-COMでFAXや留守電機能が使える
回転式パネルで縦置きもOK
機能充実で価格も安い

発売元	アイワ株式会社
価格	34,800円
問い合わせ	03-3371-7981
付属品	RS-232Cケーブル、変換アダプター、モジュラーケーブル
URL	http://www.aiwa.co.jp/exhibi/new_p98/tm-ad1281.html



液晶ディスプレイは回転式なので、縦置きでも横置きでも利用できる。

アイワが2月10日に発売したTM-AD1281は、TM-AD1280の後継機種にあたる。「RVS-COM Lite」によるFAX(G3)留守番電話などのテレフォニー機能を搭載したほか、-LCR3などにも対応。定価も34,800円と、TM-AD1280の47,800円から1万円以上も下げた。実勢価格ですでに3万円を切っており、コストパフォーマンスの高いITAといえそうだ。

縦横どちらにも置ける

角張った感じがするシンプルなデザインだが、縦横どちらにでも置けるように液晶パネルが回転式になっている。ゴム足が縦横両方に付いていて、滑りにくい構造だ。同一デザインのTM-AD1280が平成9年度通産省選定「グッドデザイン商品」(情報・通信機器部門)に選ばれたというだけあって、すっきりとした印象のフォルムに仕上がっている。液晶パネルは、通常は時刻が表示されていて、電話をかけたり受けたりするときには電話番号が、またデータ通信時にはモードや速度が表示される。背面に配されて

いることの多いIDSUの切り離し、極性反転、終端抵抗といったスイッチは、本体横の小さな蓋の中にあるディップスイッチで設定する。また、バックアップ用の電池ボックスは、上部を覆うように取り付けられたカバーを取り外すと現れる。

「RVS-COM Lite」のテレフォニー機能

TM-AD1281は、同期64/128Kbps、非同期38.4Kbps(V.110)に加え、PIAFSもサポートしている。128Kbps(MP)においてはBODやBACPにも対応し、停電時も電池による電源バックアップでアナログポートを使うことができる(ポート1のみ)。データ通信機能については特に問題はないので、TAを初めて買う人も困ることはないだろう。

また、TAの世界では新たな定番になりつつある通信ソフト「RVS-COM」に対応したTAとしてはこのTM-AD1281は最も安いITAということになる。「RVS-COM」はドイツのRVS Datentechnik社が開発し、メガソフトが日本

語版を販売する。電話やFAX(G3)から電子メール、ファイル転送機能などをパソコンから操作できるようにしたソフトだ。TA側でも、このRVS-COMの機能が使えるようにするための機能拡張が行われており、通信時のデータのみならず通話時のオーディオ/通話データをコンピュータで扱うことができるようになっている。この機能によってさまざまなテレフォニー機能をコンピュータ側のソフトで実現できるわけだ。

TM-AD1281に付属する「RVS-COM Lite」は、「RVS-COM」の機能限定版である。FAXの送受信は、Microsoft ExchangeやWindows Messagingなどに「RVS ファックスサービス」として組み込まれ、TAだけでFAXの送受信ができる。また電話機能では、パソコンのマイクとスピーカーで電話をかけることが可能になる。実際の用途としては、FAX情報サービスにパソコンから電話をかけて情報を取り出すといった使い方が便利だろう。また、留守番電話機能では、音声をサウンドファイルとして保存できるので、あとで加工したり、そのままメールに添付して送ったりできる。留守番電話の応答メッセージを自分で作れば、時間帯ごとに異なるメッセージを流すことも可能だ。受け取った留守録メッセージは、FAXと同様に受信トレイに入れて再生できる。「ファイルトランスファー」はファイル転送機能で、「RVS-COM」が動作するコンピュータ間でファイルの送受信ができる。大きなファイルを送りたいとき、セキュリティー上インターネットに流したくないときなどには便利なファイル転送機能だ。

また、「RVS-COM Lite」をスタンダード版にアップグレード(10,500円)すると、これに加えてFAXの一括送信やコンピュータのリモートコントロール機能、RVS電子メール、日英バイリンガルOCR機能などが追加になる。なお、スタンダード版は4月末ごろ、メガソフトより発売の予定だ(予定価格28,000円)。

アナログ機能も充実

TM-AD1281は-LCR3に対応するため、すべてのアナログポートとデータ通信でそのままLCR機能が使えるようになる。遠距離の電話をよく使うには便利な機能だ。2つのアナログポートは、それぞれに40か所の短縮番号を登録することができる。また、短縮の最初の10か所を「プライベートコール」に設定すると、その番号からの電話のときにはそのアナログポートの電話だけが鳴るようになる。また、アナログポートはナンバーディスプレイ電話機対応ではないが、液晶表示にはアナログからの電話番号を表示できる(ナンバーディスプレイ対応)。ただし、NTTとナンバーディスプレイの契約をしなければ、番号表示は携帯電話やISDNからの電話だけとなる。

試用レポート

① インストール

インストールはモデム設定ファイルを使って行う。V.110(38.4Kbps)や同期64/128Kbpsに加えて、Dチャンネルバケット対応の設定ファイルも付属する。設定は、他のTAと同様に簡単だ。ただ、BODの設定などができるユーティリティーは付属しないため、ハイパーターミナルなどのターミナルソフトでATコマンドを使って設定することになる。ATコマンドの詳しいオンラインマニュアルはあるものの、初心者には難しいだろう。アナログポートの設定には専用の「アナログポートかんたん設定ユーティリティー」が付属する。こちらは非常にわかりやすい設定ユーティリティーだ。「はじめの設定」、「もっと設定」、「さらに設定」と基本的な設定から高度な設定までがグループ分けされ、説明やヘルプもわかりやすく簡単だ。この「アナログポート設定」のようにわかりやすいユーティリティーで、BODなど簡単なデータ通信の設定もできればな



「RVS-COM Lite」の電話機能の操作画面。

お便利だろう。使いやすいユーティリティーだけにちょっと残念だ。

なお、本体前面の「ファンクションボタン」は、データ通信時に1Bと2Bを手動で切り替える機能が割り当てられている。

② 電話、FAX機能を使う

次に「RVS-COM Lite」をインストールした。最初にうっかりウィンドウズ95の「受信トレイ」を入れ忘れ、インストールし直す羽目になってしまった。「受信トレイ」は必ず事前にインストールしておこう。「RVS-COM インストールウィザード」の画面に従ってTAの種類や電話番号などを設定するだけで最低限の設定はできる。それ以外にも難しそうなお設定項目が並んでいるが、とりあえずそのままで大丈夫だ。FAXモデムを相手にFAXを送受信してみたが、ネゴエーション動作がすばやく、14.4KbpsでFAXを送ることができた。FAXに関してはFAXモデムを使うのとまったく遜色ない操作感だ。2つしかないアナログポートにFAXモデムを接続してしまうと残りは1ポート。TA本体でFAXの送受信ができるということは、アナログポートが1ポート増えたようなものだ。「電話」アイコンから電話をかける機能は、イヤホンマイクなどを使うといいが、サウンドカード用の専用のハンドセットがほしいところだ。なお、「RVS-COM」では、FAXの処理のすべてをコンピュータのCPUで処理するので、少なくともペンティアム90MHz以上のマシンが必要だ。

留守番電話機能では、留守電のメッセージを作成して、留守電モードにすればOKだ。留守にかかってきた電話はサウンドファイルに留守録され、あとで何度でも再生できる。相手がFAXの場合は自動判別される。ただ、アナログポートの設定で転送機能などを設定しているときは、そちらが優先になるので注意が必要だ。また、「RVS-COM」を使って発信したFAXや電話は本体の通信履歴に残らない。RVS-COMでFAXや電話の機能を使うときは、コンピュータですべての処理を行うため、TA側に履歴が残らない。

③ ファイル転送

今月は複数の「RVS-COM」対応TAを入手できたので、「トランスファーマスター」についてもテストすることができた。電話番号とファイル転送専用のユーザー名やパスワードを指定して接続すると、相手のコンピュータの指定したフォルダとの間でファイルを送受信できるよ

うになる。「トランスファーマスター」の画面はエクスプローラに似た画面で、そこに表示されているファイルは接続先のコンピュータのフォルダにあるファイルだ。メニューから転送できるほか、エクスプローラからのドラッグ&ドロップでも転送可能で、扱いやすいファイル転送ソフトだ。実際の転送にはzmodemが使われている。500Kバイトのバイナリーファイルとテキストファイルを用意して、ISDN経由で転送してみたところ、バイナリーは68秒、テキストは40秒で送信が終了した。それぞれ7.3Kバイト/秒、12.56Kバイト/秒という転送速度になった。64Kbpsでの転送速度としてはよい値だ。しかも、テキストファイルについては圧縮転送されている。インターネットなどを介さない接続なので、効率がよくセキュリティも確保しやすいファイル転送手段だ。特定の相手と大きなファイルのやり取りをしたい場合には、なかなか優れた方法になるだろう。低価格ながらTAとしての基本的な機能は備え、さらに注目の「RVS-COM」に対応したTAならば、これからISDNを導入してTAを買う人はもちろん、TAの買い替えを検討している人にもオススメだ。

(梅垣まさひろ)



背面。左から、電源スイッチ、アナログポート2つ、アース、S/T端子、RS-232Cポート、ISDN端子。

TM-AD1281

V.110(非同期)	9.6/19.2/38.4Kbps
同期	64/128Kbps (MP)
PIAFS	
専用線/OCNエコノミー	x
Dチャンネルバケット	
DTE速度	230.4Kbps
BOD	BACP対応
DSU	
S/T端子	1
アナログポート	2
ナンバーディスプレイ	液晶表示のみ
FAX機能	(RVS-COM)
LCR	-ALPHA3
停電対策	単3電池×8
液晶表示	
ファームウェア	フラッシュメモリー
外形寸法(W×D×H)	150×209.3×52
重量(電池除く)	約800g
消費電力	約13W

Atermの機能を拡張するS/T端子ユニット

高機能S点ユニット (PC-IT/UX1)

Check!

バス配線したTA間での内線通話を実現
将来はパソコン間でも通信可能になる
接続するISDN機器を選ばない

発売元	NEC
価格	7,000円
問い合わせ	0120-498-563
付属品	ユーティリティCD-ROM、Atermシリーズ用ファームウェアバージョンアップディスク
URL	http://www1.meshnet.or.jp/aterm/product/option/pcitux1.htm

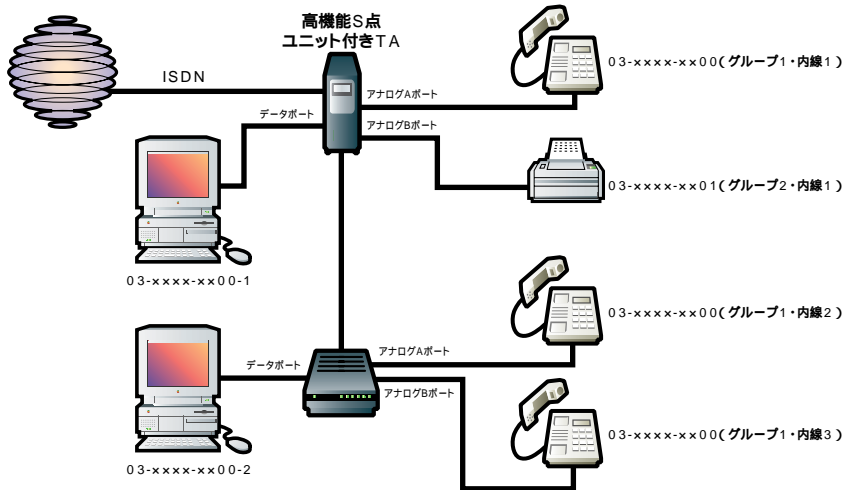


幅10センチほどの高機能S点ユニットのボードには、S/T端子が2ポート備えられている。

高機能S点ユニットPC-IT/UX1は、NECのTA、Aterm50、65シリーズ、IW60HS DSU用に用意されたS点ユニットだ。本体にS/T点がないこれらのTAにこれを組み入れれば、ISDN機器のバス配線(デジチェーン)が可能になるだけでなく、接続したすべての機器間で通話や通信(6月予定)ができるようになる画期的なユニットだ。

これまでにない多機能なS点ユニット
現在販売されているほとんどのTAとダイヤルアップルーターには1つまたは2つのS/T点が無いられている。このポートは、DSUのない機種では必ず1つはDSUに接続する。残った1つの

高機能S点ユニットを使った接続の例



外線は各番号のすべての電話機を鳴らすか特定の電話機を鳴らすかが設定できる。内線は、各グループ番号と内線番号を使ってかけることになる。コンピュータによる通信も同様だ。
例：グループ1の内線1にかける場合、「1*1」となる。



Aterm IT50 DSUの背面。左上の2つのS/TポートがPC-IT/UX1だ。その下はISDN端子と極性反転スイッチ。右側は上から停電スイッチ、アナログポート2つ、RS-232Cポート、電源スイッチ、アース端子。

ポート、またはDSU付きの機種すべてのポートは、他のISDN機器を接続するために使用する。通常、DSUを含めたISDN機器のバス接続は、最大8台までとなっている。

S/T点を使ってTAを接続する場合、同一のTAに接続した電話機同士でないと、内線通話はできない。また、各TAに接続したコンピュータ同士の通信はできない。

そんな従来のTAのS/T点間接続の弱点をすべて解消してくれるのが、この「高機能S点ユニットPC-IT/UX1」だ。このユニットを装着した対応TAをネットワーク的に最上流に接続（ローゼットからのモジュラージャックに接続）すれば、以下に接続するTAにつないだ電話機やコンピュータと内線通話やデータ通信を行うことができるようになる。

試用レポート

① 設定は簡単

接続するTAは他社製でもOK

今回はAtermシリーズのなかでも廉価版のIT50 DSUを使用した。設置は簡単で、Aterm IT50 DSUの背面にこのユニットを差し込むだけ。各種のケーブルをつないで電源を入れ、コンピュータにTAのドライバーを組み込めばAterm IT50 DSUはすぐに使えるようになった。このあとはユーティリティのメニューに従って契約者番号（電話番号）と、もしあればダイヤル

番号やサブアドレスを各アナログポートとデータポートに割り振らばいい。このときの割り振りには、電話番号とサブアドレス、グローバル着信の設定によって、内線番号とベルを鳴らすときのグループや優先順位を付けることができる。

テストでは、内線はTA間でも問題なくできたが、かかってきた外線転送は、TA間ではできなかった。この「TA間通話転送」機能は、5月のファームウェアバージョンアップで実現するという。

また、Atermは最上流に1台あれば、以下につなぐTAは他社製でもかまわない（接続確認済みのTAのリストはNECのホームページに掲載されている）。つまり高機能S点ユニットも1つあればいいというわけだ。今回のテストではリストになかったオムロンのTA、MT128B-DとNTT-TE東京/ピー・ユー・ジーのダイヤルアップルーターMN128-SOHOを接続したが問題なく通話できた。もちろんMN128-SOHOにイーサネット接続したコンピュータからのインターネット接続やネットワークにも支障はなかった。

② 内線ダイヤルアップで

データ通信ができるようになる

気になるTA（に接続したコンピュータ）間のデータ通信は、それぞれのTAのデータポートにサブアドレスを振り、その番号にダイヤルアップで内線をかけることで行う。通信速度は64Kbpsで、イーサネットなどの本格的なネットワークに比べれば低速だが、インターネットでやりと



ユーティリティソフトでは、各TAのそれぞれのアナログポートを設定できる。

りする程度のデータまでなら使用に堪えるというわけだ。ただし、この機能は6月のファームウェアバージョンアップを待たなければならぬためテストはできなかった。とはいえ、すでに告知はなされており、料金もかからないので安心はできるだろう。

③ 電話がメインのSOHOには魅力的な商品か

前述のように、高機能S点ユニットを使ったTA間データ通信は、64Kbpsでしか行えないため、本格的なネットワークを考えている人には向かない。しかし電話機を離れた部屋に数台設置しなければならないが、内線も使いたいというときには非常に便利だ。また、複数のコンピュータがあり、相互にデータのやりとりはしたいがイーサネットを構築するほどではないというときにもいいだろう。（編集部）

高機能で安価な

Aterm IT50 DSU



今回の高機能S点ユニットのテストに使用したAterm IT50 DSUは、NECのAtermシリーズでも廉価版のもの。しかし、機能は上位機種のアterm IT65と同等のものを備えている。アナログポートこそ2つしかないが、通信機能では128Kbpsまで対応でBOD機能も備えており、OCNやPIAFSにも対応。ナンバーディスプレイやNEC製TAの特徴である電子メール着信通知機能も使用できる。1台目のTAとしてはお買い得な1台だ。

発売元	NEC
価格	39,800円
問い合わせ	0120-498-563
付属品	ISDNケーブル、RS-232Cケーブル、D-SUB9ピン変換コネクタ、Mac用変換コネクタ、縦置き用スタンド

URL <http://www1.meshnet.or.jp/aterm/product/it50/it50dsu.htm>

AtermIT50DSU (NEC)

対応データ通信方式	V.110(非同期)	28.8/38.4/57.6Kbps
同期		64/128Kbps
PIAFS		
DTE速度		230.4Kbps
BOD		
DSU		
S/T端子		×
アナログポート		2
ナンバーディスプレイ		
停電対策		単3乾電池×6
液晶表示		
専用線/OCNエコノミー		
ファームウェア		フラッシュメモリー
外形寸法(W×D×Hミリ)		57×142×182
重量(電池除く)		約810g
消費電力		約8.5W

発売元	株式会社マクニカ
価格	6,800円(ソフトのみ) 17,800円(カメラバック)
問い合わせ	045-939-6140
動作環境	ペンティアム133MHz以上を搭載した ウィンドウズ95/NT4.0マシン、32M バイト以上のメモリー、100Mバイト 以上のハードディスクの空き容量(プ ログラム約40Mバイト、ワークスぺ ース約60Mバイト)、ビデオキャプチャ ー機器

URL <http://www.macnica.co.jp/livemail/index.html>

LiveMailは、マクニカが発売するビデオ電子メール作成ソフトだ。CCDカメラなどで撮影した映像や音声を圧縮することができる。ビデオデータはマイクロソフトのNetShow形式のファイルで作成されるので、受信側のコンピュータにNetShowがインストールされている必要がある。NetShowはマイクロソフトが無償配布しているが、ウィンドウズの場合は、インターネットエクスプローラ(4.0以上)がNetShowをサポートしているため、新たにインストールする必要はない。

添付ビデオファイル作成ソフト

ビデオ電子メール作成ソフトといっても、LiveMail自体にメール送受信の機能はなく、通常使っているメールソフトを使って、作成したファイルを添付して送ることになる。ただし、LiveMailがサポートするメールソフトを使っている場合には、メールソフトの新規メッセージ作成画面を起動して圧縮したファイルを添付してくれる。またLiveMailは、作成したビデオデータをサーバーにアップロードもできるので、ウェブ用にちょっとしたストリーミングコンテンツを作ることできる。

試用レポート

① 操作はシンプル＆簡単

インストール時に「ビジネスモード」か「ホビーモード」を選択し、必要なモードのみがインストールされる。フレームなどの遊びがないため、ビジネスモードの方がアプリケーションのサイズが小さい。

まずは「ホビーモード」を使ってみる。LiveMailを起動するとメインメニューが現れるので、最初に「メールソフトウェアを選ぶ」を選択して、自分が使っているメールソフトを登録して

動画と音声をNetShowで送れる

LiveMail Ver.2.0

Check!

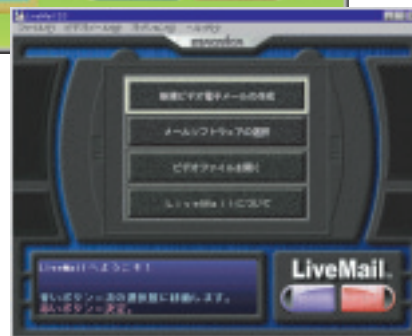
NetShow形式でビデオ電子メールを作成
メールの送信はいつものメールソフトで
用途に合わせてモードを選べる



「ホビーモード」では、フレームを付けたビデオデータが作れる。

おく。前述のように、選択肢にないメールソフトを使っている場合には「ディスクに保存」を選ぶ。ビデオファイルの作成は、LiveMailの指示に従って行えば簡単にできる。「ホビーモード」にはフレーム画像が多く用意されているので、プリクラのように楽しい演出ができる。撮影したビデオデータは圧縮して送信するのだが、「ホビーモード」では相手がLANの場合、ISDNの場合、モデム接続の場合と3タイプの圧縮モードが選択できる。圧縮率など気にせず相手の環境を選択すればいいのは初心者への配慮だろう。圧縮が終了すると作成したビデオが再生されるが、急ぐときにはスキップしてもかまわない。

次に「ビジネスモード」をインストールしてみる。アプリケーションを起動するとメニューが現れるが「ホビーモード」に比べるとすっきりと落



「ビジネスモード」のメインメニュー画面。

ち着いた印象だ。ビデオを演出するフレームはないが、操作は「ホビーモード」と同じ要領で行う。

複雑な操作が必要ないのは初心者にとっても扱いやすいし、ヘビーユーザーにとってもシンプルで使いやすいだろう。ホームページを持っている人ならば、ビデオキャプチャーカード経由でコンピュータにビデオを取り込んで簡単なインターネット放送局だって作れるわけだ。(編集部)



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp